

親鸞聖人のお手紙

中央仏教学院講師 北島隆晃



親鸞聖人は晩年を京都で過ごすなかで、和語の聖教を多数撰述して、教化伝道を行っています。また「和讃」を著して、易く教えを理解できるように配慮され、門弟の質問には直接口頭で、あるいはお手紙を書いて応えています。

それは、浄土真宗すなわち往生浄土の真実の教えを、少しでもわかりやすく明らかにしようと書かれたものです。阿弥陀仏のはたらきによって浄土に生まれ仏になる教えを、門弟が誤ることなく受けとめることができるよう、繰り返しあるいは表現をかえて書かれています。

そのうちお手紙は、門弟からの質問に返答するかたちで記されるものが多く、そこには門弟間におこった疑問や、生活の上での教えの受けとめ方に対する、聖人の教化が窺えます。

『註釈版聖典』に収められている聖人のお手紙（「親鸞聖人御消息」）は全部で四十三通ありますが、そのなかで、第十三通（『註釈版聖典』760頁）は特異な形態のお手紙です。関東の門弟の一人である慶信房の質問状に、聖人が直接加筆訂正を施して送られたものなのです。慶信房は「このような受けとめ方で間違いないでしょうか」と質問状を送ってきました。その内容は概ね間違っていないが、気をつけなければならない表現などがあるので、それを聖人が訂正をしたり書き加えたりすることで、念仏の教えを綴る正しい文章に書き換えられているのです。ですから、このお手紙を見ると、門弟の間でおこった疑問がどのようなもので、それに対して聖人がどのように教化を行っていらっしやるのかを知ることができます。

聖人が加筆訂正しておられる箇所を見てみると、「疑心なくよろこびまゐらせて、一念するに往生定まり」（同761頁）とあるところの「一念するに」を「一念までの」へと訂正されています。慶信房が、「疑いなく信じよこんで、〈一声の念仏で〉浄土に往生することが定まる」と書いているところを、聖人が、「〈信心を得たなら、たとえ一声の念仏であっても〉浄土に往生することが定まる」と改められているのです。

また、「まさしき真実報土にいたり候はんこと、この度、一念にとげ候ひぬるうれしき」（同762頁）とあるところの「一念にとげ候ひぬる」を「一念聞名にいたるまで」へと訂正されています。慶信房が、「真実の浄土に生まれていくことを今、〈一声念仏するところで完成する〉うれしき」と述べ

ているところを、聖人が、「真実の浄土に生まれていくことと、〈名号のいわれを聞いて信心を得て一声の念仏を称えること〉とがありがたいことである」と改められているのです。

ここで聖人が加筆訂正をされたのは、「一念」という言葉の使い方に注意をされたのではないのでしょうか。『仏説無量寿経』（大経）で、本願が成就したことを説かれる釈尊のお言葉（成就文）には、「その名号を聞いて信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。」（同41頁）とあります。聖人は、この「乃至一念」の「念」とは時を表していて、信心をいただいた「まさにそのとき」往生が定まるといわれています。私を往生させるのはたらきは阿弥陀仏の側で完成されて、そのはたらきを私がいただくのですから、私が何回称えるかということは問題にならないのです。

慶信房の「一念するに」や「一念にとげ」という言い方が、一声の念仏にこだわっているなら、私が称える念仏の回数を問題としていることになり、聖人のお示しとは違うことになってしまいます。聖人は、「一念」の言葉はそのままに、その前後に加筆訂正することで、信心こそが大切であることを示されました。念仏はたとえそれが一声であっても、阿弥陀仏の喚び声に応える念仏であることを示されているのでしょう。教えを誤ることなくしっかりと受けとめるようにという、厳しくも懇切な聖人の教化を窺い知ることができます。

この第十三通では全体にわたって、信心を得た念仏者が、摂め取って捨てない阿弥陀仏のはたらきのなかで毎日を過ごしていくことが明らかにされています。阿弥陀仏の光明に照らされて生きていく念仏者は、信心という智慧をいただくことで、自らの姿に気づかされ、おかげさまやありがたいということを感じながら日々を送ることができるのです。ですからそのような念仏者のことを、煩惱をそなえた凡夫でありながら「如来とひとし」といわれるのです。

慶信房は經典や和讃、聖人がお書きになった和語の聖教などを懸命に学ばれたのでしょう。阿弥陀仏のはたらきによって浄土に生まれ仏になる教えを、必死に自分自身の事柄として受けとめようとされました。しかし、必死に頑張れば頑張るほど、あてにならない自分の行為や心を、いつの間にかあてにしてしまっていたかもしれません。その慶信房に、信心をいただき報恩のお念仏を相続させていただくなかで、自らの姿に気づかせていただきましょう、と聖人はお教えになっているように思います。それはそのまま、私へのお示しであるようにも思います。

（教学伝道研究センター研究員：真宗学）